

國學院大學學術情報リポジトリ

神田神社の仕事始め参拝：
企業と神社に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋野, 淳一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001058

神田神社の仕事始め参拝

——企業と神社に関する一考察——

秋野 淳 一

はじめに

新年を彩る初詣の賑わいが、メディアを通じてお茶の間に届けられるようになって久しい。また、新年の仕事始め（三が日明けの平日「二月四日頃」）にサラリーマンがスーツ姿で神社へ集団参拝し、神社境内が賑わう光景も、しばしばテレビ中継で取り上げられ、すっかり正月の風物詩としても定着した感がある。この仕事始めの光景が繰り返し報道され、一般によく知られているのは東京の神田神社（神田明神）の仕事始め参拝である。

平成最後となった平成三十一年（二〇一九）一月四日の仕事始めにも多くの企業が神田神社に参拝する様子が報じられている。たとえば、平成三十一年一月五日付の『朝日新聞』朝刊は「うちにも行列を」の見出しをつけて、「仕事始めを迎える企業も多かった四日、東京都千代田区の神田明神には、商売繁盛などを願う会社員らが参拝に訪れ、長蛇の列が鳥居の外まで延びた。神社によると、この日の参拝客は約三十万人。外国人の姿も目立った」と報じ、社

殿の前で行列を作り手を合わせて真剣に拝んでいる写真を掲載している。

同年一月四日付の『讀賣新聞』夕刊は、「復興、出直しの年に 仕事始め」の記事のなかで、「東京都千代田区の神田明神は、一年の商売繁盛を願う多くのビジネスマンや会社経営者らで朝からにぎわった」と報じ、埼玉県川口市のエアコン販売会社社員、亀山健太郎さん（二六）は、同僚約三十人とともに参拝し、三万円の熊手を購入した。消費増税について『どんな影響が出るか分からないが、サービス第一で切り抜きたい』と語った」とするなど、複数の参拝者の声⁽²⁾を掲載し、社殿前で行列を作って、真剣に拝むサラリーマンの姿が捉えられた写真を載せている。

同年一月五日付の『毎日新聞』東京版朝刊は、「仕事始めの四日、東京都千代田区の神田明神は、スーツ姿のビジネスマンらが大勢訪れ商売繁盛などを祈願した。神田明神は東京・大手町や丸の内ビジネス街から近く、毎年多くの企業関係者らが初詣に訪れる。今年は七日が仕事始めの企業も多く、四日に千社以上、七日に千五百社以上の企業が毎年厳しくなっているが、「今年も達成できますように」と謙虚な気持ちで祈願しました』と笑顔で話していた」と伝えている。

大鳥居信史氏（現・神田神社名誉宮司）の編著による『神田明神のこころ』は、正月三が日後の四日、五日には企業の初詣ともいえる「仕事始め参拝」で各企業が氏神や崇敬する社寺に社員一同で参拝する姿も、現在では多く見られる光景であることを指摘したうえで、「神田明神は日本の国作りをされた大己貴命（だいきく様）と少彦名命（えびす様）をご祭神として祀っているため、例年一月中で約一万社の企業が昇殿参拝し、お賽銭箱の前での参拝者は数え切れないほど多く、神社より秋葉原駅まで、神社より御茶ノ水駅まで、それぞれ長い行列ができる⁽³⁾」としている。

こうしたスーツ姿の会社員で大きな賑わいを見せる神田神社の仕事始め参拝であるが、これまで研究対象として取



写真1 神田神社の仕事始め参拝 鳥居前の賑わい
(平成24年[2012]1月4日、筆者撮影)

いく必要性を指摘した。⁽⁵⁾

他方、企業が仕事始め参拝を行なうのは、神田神社の事例にとどまらず、たとえば、國學院大學研究開発推進センター・渋谷学研究会が研究対象とする東京渋谷の金王八幡宮や北谷稲荷神社でも見ることができるとある。⁽⁶⁾ 神田神社の仕事始め参拝の分析結果をもとに、渋谷の事例と比較検討することも可能である。また、都市と神社の関係を考え⁽⁷⁾

り上げられることは少なかった。筆者は、宗教学・宗教学会学の立場から、「社会変動と祭り(神社)」を主たる研究テーマとして、多くの観客と参加者を動員して行なわれる現代の神田祭(神田神社・大祭)について、戦後地域社会の変容との関係から考察を行なってきた。その結果、現代の神田祭が賑わいを見せる要因として、五つの特徴(要素)が明らかとなり、ほかの都市祭りとの比較を目的に「神田祭モデル」(正式名「神田祭にみる都市祝祭モデル」)を提示した。そして、この五つの特徴(要素)の一つが「企業の参加」であることを明らかにした。⁽⁴⁾ また、企業の参加と都市祭りの関係について、神田祭、山王祭、渋谷の祭礼を中心に考察を行ない、社外に対して「見せる」意味のみならず、社内に対しても新たな役割を持つことを明らかにした。そして、都市祭りへの企業の参加を、企業の神社の祭りや氏神社などへの企業の集団参拝、ほかの年中行事における企業の参加とも対比し、総合的に捉えて

るうえでも、多くの参拝者を集める神田神社の仕事始め参拝は注目すべき事例として捉えられるからである。

そこで、本稿では、神田神社の仕事始め参拝に着目し、同神社の仕事始め参拝がいつ頃から隆盛を見せるようになったのか、その背景に何があったのか。また、現在に至るまで仕事始め参拝が賑わい続ける要因はどのような点にあるのかについて、新聞記事を活用しながら考察を試みたい。そして、そこから見える企業と神社の関係について指摘したい。

一、神田神社の仕事始め参拝への道筋―企業と神社―

「企業と神社」というと、企業の神社が想起される。本題に入る前に、まず企業の神社の特徴、企業の神社の祭祀と参列者、新年の企業と神社の関係について概観しておきたい。そのうえで、神田神社の仕事始め参拝に至る経緯を見ていきたい。

(一) 企業の神社

神社新報社が編纂した『企業の神社』⁽⁸⁾には、四十八社の企業の神社と、工業団地に祀られる一社（岡崎石工団地の岡崎石工団地神社）が紹介されている。『企業の神社』は、昭和五十八年（一九八三）八月～昭和五十九年（一九八四）十二月まで、『神社新報』に「企業の神社」をテーマにした五十回の連載と、昭和六十年（一九八五）の正月特集号「企業の神社 総集編」で識者の意見を交えてまとめたものを集録したものである。担当記者は、のちに國學院大學日本文化研究所の研究員を経て、江戸川大学教授を歴任した宇野正人である。

宇野正人は、「稲荷」を祀る神社は全体の二、三割程度であることを指摘したうえで、企業の神社について以下のよ

うに整理をしている。どのような神社を祀っているのかは、①創業者、あるいはそれに類する人の信仰する神社が祀られる場合、②その立地するところの産土・氏神の神社が祀られる場合、③その業種に関連する神を奉斎する神社が祀られる場合、の三つの種類に大別している。また、企業内の各事業所、工場が同一の神社を祀る場合と、企業内の各事業所、工場が各々異なった神社を祀る場合、の二つの種類があることを明らかにしている。¹⁰⁾

宇野の整理をもとに、一つのポイントになると考えられるのが、企業の立地する場所の産土神・氏神の神社が祀られる場合があることで、そうした特徴があるがゆえに、各事業所と工場がそれぞれ異なった神社を祀るのではなからうか。企業が立地する場所の産土神・氏神を祀る企業の神社は、サッポロビール札幌工場の札幌神社（北海道神宮と同じ御祭神を奉斎）、王子製紙苫小牧工場の王子神社（北海道神宮と苫小牧の産土・樽前山神社の御分霊六柱を奉斎）、日本石油新潟製油所の伊夜日子神社（弥彦神社を勧請）、秩父セメントの有恒神社（撰社に秩父神社の御祭神を奉斎）などが挙げられる。

では、企業の神社では、どのような社員が参列して祭りが行なわれているのであろうか。

『企業の神社』から見ていくと、たとえば、資生堂の成功稲荷神社では、四月八日の創立記念日に社長以下役員、従業員代表の参列のもと、祭典が行なわれ、横浜ゴム三重工場の稲荷神社では、毎月六日に、部課長、労組委員が参列し安全祈願の祭りを行なう。また、大同特殊鋼の福光稲荷神社では、毎月朔日を月参りの日と定め、工場長をはじめ、管理職ほとんどが参列のもと、熱田神宮神職の奉仕により、安全祈願祭が斎行されている。日産ディーゼル工業の弥栄神社では、伏見稲荷大社の祭りの前夜（四月下旬）を祭日として、会社幹部、労組代表、構内事業所代表など、約三十人の参列のもと、祭典が執行される。トキコトキコ八幡神社では、創立記念日の七月十九日前後を祭日として、役員・従業員が参列のもと、祭典、永年勤続者等の表彰式を行ない、毎月第一水曜日に月例祭を執行し、本社、川崎

工場の幹部の参列、社長による祝詞奏上が行なわれているという。⁽¹⁾ 幹部や管理職が中心となって参列し、企業の神社の祭祀が行なわれていることがわかる。⁽²⁾

一方で、『企業の神社』からは、従業員が全員参加する事例も見られる。たとえば、竹中工務店の四月第一土曜日の竹千代稲荷神社例大祭は「従業員全員参加」、日本鉱業中条油業所の山神社では、毎月一日の安全祈願祭は「油業所の全職員が参列」して行なわれるという。⁽³⁾

以上のように、一部には従業員が全員参加して祭典が行なわれる企業の神社もあるものの、多くは幹部や管理職が中心となって参列し、祭祀が行なわれていることがわかる。

(二) 新年の企業と神社

幹部や管理職を中心に祭祀が行なわれる企業の神社であるが、新年において企業は神社とどのような関わりを持っているのであろうか。神社新報社が編纂した『企業の神社』には、新年の企業と神社の関係を示すいくつかの記述がある。まず、企業の神社に、新年に参拝する行動が複数見られる。

日本植生の植生神社では一月一日に年頭祭、朝日麦酒の旭神社では年初の新年祭、柳川採種の研究会神社では一月四日の事初め祭、王子製紙の王子神社では一月四日の新年操業祈願祭、三菱金属の土佐稲荷神社では新年祈願祭、日立製作所日立工場の熊野神社では歳旦祭（二月一日）、トヨタ自動車本社工場の豊興神社では一月四日の新年祭、朝日放送のテレビ朝日稲荷神社では年始の仕事はじめと年末の納め稲荷、東京瓦斯の豊洲稲荷神社では年はじめの安全祈願式、常磐興産の山神社では一月一日の歳旦祭、日本空港ビルディングの穴守稲荷神社では一月一日の元朝祭、を行なう。⁽⁴⁾ 出光興産千葉製油所（市原市姉崎）では、工場内に宗像神社を祀るが、大晦日の夜から正月の期間、神社に

灯明をかかけ、昼夜の別なく、地元の人々を含めた初詣の便をはかっているという。新日本製鐵の高見神社では、一月五日に新日本製鐵株式会社八幡製鉄所並関連企業二百社安全祈願祭を斎行する。日本鉦業の山神社では、正月の初詣や山神祭などのときに、油業所関係者のみならず、近在の人々も参拝するという。三井造船千葉事業所の香取神宮では、十二月の仕事納めの日に、各職場の道具を神前で祓う「道具納御祓式」を行ない、年初の仕事初めの最初の日曜日に、社長以下幹部が香取神宮へ参拝し、年始安全祈願を行なう。⁽¹⁵⁾

また、神鋼電機の子鋼電機の神社では、十二月二十九日の御用納めの際に、安全祈願を役員以下代表の参列のもと、祭典が行なわれている。⁽¹⁶⁾

企業の神社では、元日、一月四日の仕事始め、などとともにも年末の仕事納めにも参拝を行なっていることがわかる。崇敬社や氏神社への参拝行動も見られる。竹中工務店では、毎年一月第一土曜日の伏見稲荷大社と、竹中工務店が祀る竹千代稲荷神社で新年の祈願を行なう。伊夜日子神社を祀る日本石油新潟製油所では、正月にバスを仕立てて弥彦神社本社へ、安全祈願の初詣を盛大に行なっているという。稲荷神社を祀る横浜ゴム三重工場では、工場の年中行事として、正月の仕事初めに社員は神宮と猿田彦神社を参拝する。⁽¹⁷⁾

以上のように、企業は新年において、企業の神社への参拝のみならず、少ない事例ではあるものの、崇敬社や氏神社に参拝し、祈願を行なうケースがあることがわかる。

(三) 神田神社宮司と仕事始め参拝

「神社新報社が編纂した『企業の神社』の記述から、新年に企業の神社に参拝したり、少ない事例ではあるものの、企業が崇敬社や氏神社に参拝するケースの存在を確認できた。しかしながら、多数の企業の社員がスーツ姿で境内を

埋め尽くす神田神社の仕事始め参拝の光景とは程遠いものがある。

では、どのようにして神田神社に仕事始めに多くの企業が参拝するようになったのであろうか。次に見ていきたい。実は、当時の神田神社宮司(現・名誉宮司)の大鳥居信史氏の影響が大きかったことが指摘できる。大鳥居信史氏は、平成二十五年(二〇一三)刊行の『別冊宝島二〇八二号 日本の神様のすべて』に収録された「特別インタビュー 企業が求める神社の役割とは?」のなかで、「企業内神社を持つ企業はもともとありました。正月や創業日などに神社で社業参拝を行う企業が特になつたのは二十年ほど前からのことです。神社参拝は、住んでいる地域をお守りいただいている氏神神社に住民が参拝するのが一般的でした。しかしご存知のとおり、神田明神は千代田区・中央区といった日本有数のオフィス街が氏子地域にあります。特に大手町などの地域には住民がほとんどいません。神田明神では二十年ほど前から、企業の氏神意識の定着を図るよう促してまいりました。企業内神社をお祀りしている企業は多くありますが、それまでは企業が正月に参拝するというような風習はほとんどありませんでした。今日では正月に六千もの企業の方から参拝をいただくようになり、都内全体でも企業参拝が増えてきました⁽¹⁸⁾」(傍線―引用者)と答えている。平成二十五年(二〇一三)から二十年前というと、平成五年(一九九三)頃ということになる。また、平成十四年(二〇〇二)一月四日付の『毎日新聞』夕刊は、「神田明神は、バブル崩壊後の十年ほど前から、企業関係の参拝が増えたという」としている。平成十四年(二〇〇二)から十年前というと、平成四年(一九九二)頃ということになる。

この二つの記事から、平成四、五年(一九九二、九三)頃から神田神社の仕事始め参拝が普及し始めたことが窺える。これを裏付けるかのように、同時期に初詣の参拝者の増加を伝える新聞記事も存在する。平成四年(一九九二)十二月二十六日付の『朝日新聞』朝刊によれば、「神田祭りでは有名な千代田区外神田二丁目神田明神。正月三が日

に二十数万人が訪れ、年間を通じると百万人は軽く突破する。今年の参拝客は『例年に比べて一割ほど多い』という。同神社は、平将門と共に、商売の神であるえびす神、福德の神のだいきく様を祭る。清水祥彦・権禰宜（現・宮司―引用者註）は『商売繁盛につながる神を祭っているせいかな、昨年に比べて、不況から早く立ち直ろうと、参拝にやってくる人が目立つ』と話す。今度の正月三日は、昨年より多い三十万人の人手を予想する」と伝えている。参拝者の増加は、「不況から早く立ち直ろうと、参拝にやってくる人」によってもたらされたものでもあることがわかる。

つまり、平成三年（一九九一）三月～平成五年（一九九三）十月のバブル崩壊に伴う不況のなか、「不況から早く立ち直ろう」と、平成四、五年（一九九二、九三）頃から商売繁盛につながる御祭神を祀る神田神社へ新年の企業の参拝が増えるなかで、神田神社宮司による企業に氏子意識を高め、新年に神田神社へ参拝を促す取り組みと連動して、仕事始め参拝が拡大していったことが窺える。

二、バブル崩壊と神田神社の仕事始め参拝

仕事始めの神田神社の賑わいを伝える新聞記事は、平成七年（一九九五）から見ることができる。次に、バブル崩壊後の平成七年（一九九五）からリーマン・ショックに至る前までの神田神社の仕事始め参拝について見ていきたい。

（一）平成七年（一九九五）～十年（一九九八）

平成七年（一九九五）一月四日付の『讀賣新聞』東京版夕刊は、「東京・千代田区の『神田明神』には、平成不況からの脱出と今年の商売繁盛を祈願する企業が詰めかけた。一番乗りは、近くにある銀行の支店約二十社。午前八時から本殿に計約二百人が入り、目を閉じて祝詞に聴き入っていた。境内には、順番を待つ各企業の社員がズラリ。

五十人以上で参拝に訪れる社もあり、『不況だからまず神頼み』『経営が厳しくなり、社運隆盛を願うというより厄よけのつもり』などの声も。社員ら五人と訪れた地元企業社長の中川敏行さん（六八）は『不況の影響はあるが、嘆いてばかりはいられない。仕事始めのきょうは、一生懸命努力していく決意を神様に誓いに来た』と話していた」と伝えている。

平成八年（一九九六）一月四日付の『讀賣新聞』東京版夕刊は、「東京・神田の神田明神は、朝八時半から、スーツ姿のサラリーマンらでごった返した。同明神は『商売繁盛』で御利益があるとされ、サラリーマンらは次々に社殿に進み、神妙に頭を垂れて神主のおはらいを受けた。同明神によると、四日だけで銀行や証券会社など約千五百社の幹部が参拝。七日までには昨年を二割上回る三千五百社が訪れるという」と伝えている。

平成九年（一九九七）一月四日付の『讀賣新聞』東京版夕刊は、「正月三が日が明け、都内の神社には、仕事始めを前に、スーツにネクタイ姿で参拝するサラリーマンの姿も目立った。東京・外神田の神田明神にはこの日、丸の内、日本橋、大手町など約百社から昇殿参拝の予約があり、中には百人以上の社員を引き連れての参拝も」と伝えている。

平成十年（一九九八）一月五日付の『讀賣新聞』東京版夕刊は、「東京・千代田区の神田明神は朝から、会社ぐるみで初もうでに訪れたサラリーマンでにぎわった。同明神によると、今年の参拝予約は約九百社で、例年より一割ほど多く、この日も午前六時半すぎから列ができたという。参拝は、十数人の幹部クラスのみで行う会社が多いせいか、境内には晴れ着姿の女性はほとんど見られず、背広姿の男性ばかり。真剣な表情で手を合わせ、一年の『社業発展』や『商売繁盛』などを祈願していた。参拝した信託銀行の部長（四八）は『今年は生き残りをかけた厳しい年になりそう。早く金融システムの安定化をはかってほしい』。また、事務用品会社の部長（六五）は、『トラ年にちなみ、経済活性化のきかけとなる『ひとほえ』を与える業界が現われれば』と、やはり経済回復を期待する声が多かった」と伝えている。

各年の昇殿参拝の予約状況を記事から抽出してみると、平成八年（一九九六）一月四日は約千五百社（七日までで三千五百社、前年より二割増）、平成九年（一九九七）一月四日は丸の内・日本橋・大手町など約百社、平成十年（一九九八）一月五日は約九百社（例年より一割多い）となっている。地元企業や氏子の金融機関を中心に仕事始め参拝が行なわれていることが窺え、幹部だけでなく社員の多くが一緒に参拝をしていることがわかる。

（二）平成十二年（二〇〇〇）～十四年（二〇〇二）

平成十二年（二〇〇〇）一月四日付の『讀賣新聞』東京版夕刊は、「仕事始めの四日、大黒様を祭る東京・千代田区の神田明神では、恒例の新年参拝が行われ、近隣の企業の役員やサラリーマンらで境内がにぎわった。この日、参拝の予約があったのは金融機関、電機メーカーなど約八百五十社。午前八時から順次参拝がスタートしたが、約一時間後には、スーツ姿のサラリーマンや晴れ着姿の〇しらで境内は大混雑。それぞれ、『商売繁盛』『社運隆盛』を祈願していた。同神社では、四日から七日まで、例年並みの約三千社の参拝を見込んでいる」と伝えている。

また、同年一月五日付の『朝日新聞』朝刊は、「長引く不況脱出を願ひ、千代田区外神田二丁目にある神田明神は四日、ネクタイ姿の会社員でこったがえした。大手町、丸の内などのビジネス街に近く、氏子に大企業が名を連ねる同神社は、元日より仕事始めの日の方がにぎわうのが特徴だ。お守り、絵馬、おみくじなども人気で、経費節減のなかでも、神頼みにかける財布のひもは緩いようだ。神社によると、今年は、企業を中心とする約三千の団体から、おはらいの予約がはいっており、年々少しずつ増えてきているという。『野村証券営業部様、日立製作所営業本部様…』。境内に、大手企業名の呼び出しの声が響く。参拝でおはらいを受ける『昇殿参拝』の呼び出しを待つ、会社単位や部署単位のグループが、長い列を作った」と伝えている。

そして、複数の参拝者の声とともに、神職のインタビューも掲載され、「同神社の権禰宜（ごんねぎ）〔現・宮司―引用者註〕、清水祥彦さんによると、コンピューター関係の横文字の名称の企業の参拝が増えたのが今年の特徴だという。昨年の暮れには、二〇〇〇年問題に関連して、『安全稼働祈願』の依頼も、二十社近くあった。『コンピューターも頼れなくなったら、もう拝むしかないのかもしれないかもしれませんね』と伝えている。

平成十三年（二〇〇一）一月五日付の『朝日新聞』朝刊は、「新世紀の幕開けは神頼みから―。多くの企業が仕事を始めを迎えた四日、千代田区外神田二丁目にある神田明神の境内は、朝からネクタイ姿の会社員でにぎわった。大手町や丸の内などの企業を氏子に抱える同神社は、商売繁盛、事業繁栄の守り神。今年は約三千の企業や個人からおはらいの申し込みがあったという。景気上向きを切に願ひ、参拝者は神妙な面もちで手を合わせていた」と報じ、複数の参拝者の声を載せている。⁽²⁰⁾

平成十四年（二〇〇二）一月四日付の『毎日新聞』東京版夕刊は、先述したように「神田明神は、バブル崩壊後の十年ほど前から、企業関係の仕事始めの参拝が増えたという」ことを紹介したうえで、「四日も午前八時ごろから、多くのスーツ姿のサラリーマンが詰めかけ、境内には景気回復や業績アップを祈る柏手（かしわで）が響いた。社員約三十人と参拝した石油関連商社の竹中産業（千代田区）の竹中繁夫社長（三二）は『昨年はテロで原油価格の先行きが不透明になるほど大変な年だった。勝ち組、負け組という言葉が使われたが、このままでは共倒れになりかねない。我が社だけではなく、みんなが調和し安定していく年になってほしい』と語った」と伝えるなど、千代田区や中央区などから訪れた複数の参拝者の声を記事にしている。⁽²¹⁾

なお、平成十四年（二〇〇二）正月から、神田神社で「IT情報安全守護」の御守の本格的な授与が開始された。⁽²²⁾ 各年の昇殿参拝の予約数を記事から抽出しておくと、平成十二年（二〇〇〇）一月四日は約八百五十社（四日）

七日まで例年並みの約三千社)、平成十三年(二〇〇一)は時期は不明だが約三千の個人や企業としている。また、二〇〇〇年問題を契機にIT企業の参拝も増えたことがわかる。ただし、この時点では、千代田区や中央区などの神田神社の氏子区域や近隣地域の企業の参拝が中心であったことがインタビュー記事などから窺われる。

(三) 平成十六年(二〇〇四)～二十年(二〇〇八)

平成十六年(二〇〇四)一月七日付の『讀賣新聞』東京版朝刊は、「情報技術(IT)社会でウィルス感染などの脅威にさらされているパソコンの無事を祈り、おはらいする『IT祈とう』が今年から、東京・千代田区の神田明神で行われている。秋葉原電気街振興会と神田明神が、買い物客でにぎわう新春の街を盛り上げようと、今年初めて企画。神田明神は電気街に近いため、パソコンを守る『ITの守護神』として信仰する人も多いという。六日は、IT関連の会社員や個人のパソコン利用者らが、愛用の機器を大切に持参し、境内で祈とうを受けていた」と伝えている。

平成十七年(二〇〇五)一月五日付の『讀賣新聞』東京版朝刊は、「仕事始めとなった四日、千代田区外神田二の神田明神で恒例の新年参拝が行われた。ビジネス街などから約千五百社の役員、社員が続々と参拝し、午後には境内が「超満員」に。夕方には仕事帰りのサラリーマンも多く訪れ、景気回復や勤務先の業績アップを祈っていた」と伝えている。

平成十八年(二〇〇六)一月四日付の『讀賣新聞』東京版夕刊は、「大手企業の本社に近い東京・千代田区の神田明神では、午前八時から恒例の新年参拝が行われ、近隣企業の社員らが次々と訪れ、かしわ手を打った。九時過ぎにはスーツ姿の男女会社員で境内は満杯。十五日までの新春参拝には、例年約六千社が訪れるが、今年は景気回復や秋葉原への企業進出などの影響で予約が増え、一万社の参拝を見込んでいる。港区のIT関連企業の事業推進部長(五二)

は『株価は上昇してきているが、実感としての景気はまだ厳しい。今年こそ』の願いを込めてお参りしました』と話し」と伝えている。

また、同年一月五日付の『朝日新聞』朝刊は、「企業の『仕事始め』の四日、東京・神田の神田明神は商売繁盛を祈願するビジネスマンらで終日にぎわった。大手町や丸の内などのオフィス街に近い同神社では、この日だけで約三千社がおはらいを受けた。昨年約二千社から大幅に増えた」と伝え、社殿のなかで修祓を受けるビジネスマンの姿を撮った写真を掲載している。

平成十九年（二〇〇七）一月四日付の『讀賣新聞』東京版夕刊は、「東京・千代田区の神田明神では、恒例の新年参拝が行われ、部下を引き連れた企業経営者らが商売繁盛を祈願した。同区内の繊維製造会社社長田中裕さん（六四）は『エレベーター事故や飲酒運転などが騒がれるなか、社員が規律を守り事故を起こさないよう願いを込めた』と伝えている。

平成二十年（二〇〇八）一月四日付の『讀賣新聞』夕刊は、「千代田区の神田明神では企業経営者らが商売繁盛などを祈願した。毎年、その年の商運を祈る企業人が多数訪れる同神社。今年は午前七時過ぎから参拝者が姿を見せ始め、同九時過ぎにはスーツ姿の人たちで境内が埋め尽くされた。景気は回復基調とされているが、現場の受け止め方はまだ厳しい。電子部品メーカー顧問の能塚博義さん（六六）は『昨年は中国などの追い上げで厳しい一年だった。今年も先行きは不透明だ』。建設コンサルタント会社の東京支社長を務める中野晃治さん（六一）も、公共事業が減る厳しい情勢は変わらないとした上で、『業界の淘汰は続く。地道に効率化を図っていきたい』と気を引き締めた。毎年必ずこの日に参拝している電子機器メーカー社長の本田勝彦さん（六四）は、「米大統領選挙の年は景気が良くなる。波に乗っていきたい」と期待を込めて語った。神田明神によると、仕事始めの参拝は年々増加し、四日だけで千社

以上が参拝に訪れる」と伝えてある。この記事には、「商売繁盛を祈願する会社員らで混雑する神田明神。今年は秋葉原をPRするメードさんも参加」というキャプションを付けた、メードさんが持った大きな絵馬に役員とおぼしき会社員がマジックで願いごとを書き込んでいる写真を掲載している。

平成十七年(二〇〇五)から平成二十年(二〇〇八)までの各年の参拝者数を、昇殿参拝の予約を中心に記事から抽出してみると、平成十七年(二〇〇五)一月四日は約千五百社、平成十八年(二〇〇六)一月四日は約三千社(昨年の二千社から大幅増、四日(十五日)まで例年六千社だが一万社を見込む)、平成二十年(二〇〇八)一月四日は千社以上としている。幹部や管理職とともに一般社員も多く参拝を行なっていることが窺われる。

以上のように、平成七年(一九九五)以降、神田神社の仕事始め参拝は、毎年のように繰り返し新聞記事に取り上げられていることがわかる。しかし、この時期は、「商売繁盛」や「景気回復」などを祈願している様子は報じられていないものの、「大黒様を祭る東京・千代田区の神田明神」(平成十二年「二〇〇〇」一月四日付『讀賣新聞』東京版夕刊)や「商売繁盛、事業繁栄の守り神」(平成十三年「二〇〇一」一月五日付『朝日新聞』朝刊)など神田神社の御祭神や御利益を示す記事は少なく、「商売の神様」や「商売繁盛の神様」といった表現が頻繁に記事に登場する段階には至っていないことがわかる。

そして、平成二十年(二〇〇八)九月に、リーマン・ショックが発生することになる。

三、リーマン・ショックと神田神社の仕事始め参拝

平成二十年(二〇〇八)九月に起きたリーマン・ショック以後、神田神社の仕事始め参拝は、さらに大きな賑わいを見せることになる。以下に見ていきたい。

(一) 平成二十一年(二〇〇九)～二十三年(二〇一一)リーマン・ショック直後

平成二十一年(二〇〇九)一月五日付の『朝日新聞』夕刊は、「多くの企業が仕事始めを迎えた五日、東京・神田の神田明神には朝から、会社員らが商売繁盛を祈願するため訪れた。今年は六日の仏滅を避け、悪化する一方の景気の回復を切に願う思いから、例年以上のにぎわいを見せた。『毎年来ていますけど、今年は明らかに人手が多いですね』。参拝を終えた津村弘三さん(四八)は周りを見回した。柔道団体の講道館に勤める津村さんは『昇段を申し込む人が減って審査料収入が二割前後落ち込んでいる。世の中のお金の動きが小さいと、スポーツ界にも影響が及ぶんです』と話した。丸の内や大手町などのオフィス街に近いため、境内はスーツ姿が目立つ。午前十一時前には、おほらいを待つ人で境内はあふれかえり、長蛇の列は近くの道路まで数百メートルに達した」と伝え、社員十五人で参拝し三万円の手を受けられた渋谷区の不動産会社社員など、複数の参拝者の声を載せている。⁽²³⁾そして、参拝者数について「神田明神によると、五日の企業からの参拝の予約は約九百件と例年より一、二割ほど多く、五日だけで十万人の参拝が見込まれるという」と報じている。

平成二十二年(二〇一〇)一月四日付の『讀賣新聞』夕刊は、「東京・千代田区の神田明神には午前七時頃から、経営者やサラリーマンが集まり始め、同十時頃には境内は身動きもできないほどの混雑となった。世田谷区で内装業を営む松井益弘さん(四五)は十五人の社員らと一緒に参拝に訪れた。不景気の影響を受け、昨年の売り上げは例年の六割程度。新案件数は伸び悩んでおり、業界の見通しは昨年より厳しいという。松井さんは『今年は亀のようにじっと我慢する年。この一年を乗り切れば、その先十年は安定した経営が出来ると思じて不況を耐え抜きたい』と語った」とする⁽²⁴⁾など、複数の参拝者の声を載せている。

同年一月五日付の『朝日新聞』朝刊は、「仕事始めは神頼み 東京・神田明神」の見出しをつけて、「景気がよくなり

ますように。多くの企業が仕事を迎えた四日、商売の神様として知られる東京・神田の神田明神はスーツ姿のサラリーマンらでごった返した」と社殿前の賑わいの様子を写真入りで伝えている。そして、「神社によると、この日は十万人を超える人出があったといい、例年より一、二割は多いという。参道と神殿前は通勤電車並みの混雑で、行列は夕方まで途切れなかった。大手町の金融機関に勤める三十代の男性は、職場の同僚ら約三十人で参拝に来た。手には福を呼ぶ縁起物の熊手。『去年はとにかく厳しかった。毎年買っていますが、御利益を願う気持ちも今年はひとしおです』と伝えている。

同年一月五日付の『毎日新聞』東京版朝刊は、「多くの企業が仕事を迎えた四日、東京・大手町や丸の内ビジネス街からほど近く、商売の神様『えびす様』を祭った神田明神（東京都千代田区）には、ビジネスマンら約十万人が初詣でに訪れた。出口が見えない不況が続く中、参拝客らは景気回復や商売繁盛を祈った。この日は午前八時ごろから、参拝客らで境内が埋め尽くされ、一時はJR御茶ノ水駅近くまで行列ができた。参拝に訪れた千葉県習志野市の自営業、池田成之（しげゆき）さん（四二）は『景気がよくならなければ、何も前に進まない。もう神頼みしかない』と話していた」と伝えている。

平成二十三年（二〇一一）一月五日付の『朝日新聞』朝刊は、「お願い 跳ねて」の見出しと、社殿前で熱心に拝む様子の写真を掲載し、「正月三が日が明けた四日、商売の神様として知られる東京・神田の神田明神には仕事始めの会社員らが参拝に訪れ、スーツにコート姿の列が鳥居の外の歩道まで続いた。神社によると、この日は約十万人の人出があったという。近くの広告会社に勤める増田寛治さん（六四）は『今年こそ景気回復してほしい』と話した」と伝えている。

同年一月五日付の『毎日新聞』東京版朝刊は、「仕事始めの四日、商売の神様『えびす様』を祭った神田明神

(東京都千代田区)には、ビジネスマンらが大勢初詣に訪れた。参拝客らは神妙な顔つきで景気回復や商売繁盛を祈願していた。境内は朝からの参拝客で埋め尽くされ、夕方以降は退社後の参拝客らで一層こった返した。神田明神によると、神主におはらいを受ける昇殿参拝をする企業数は四、五日の二日間で約千六百社の見込みで、不況を反映してか昨年より多いという」と伝えている。このほか、同年一月四日付の『日本経済新聞』夕刊が神田神社の仕事始めを報じている。

リーマン・ショック直後の平成二十一年(二〇〇九)から二十三年(二〇一一)にかけて、複数の新聞が神田神社の仕事始め参拝の賑わいを一定の分量で記事にしていることがわかる。また、「商売の神様として知られる東京・神田の神田明神」や「商売の神様『えびす様』を祭った神田明神」といった神田神社の御利益がメディアによって度々報じられるようになったのも、リーマン・ショック直後の時期からであることがわかる。

こうしたメディアの影響も連動したせいも、参拝者数を記事から抽出してみると、平成二十一年(二〇〇九)一月五日は予約が約九百件(例年より一、二割多い)、十万人の参拝の見込みで、参拝者の行列は「近くの道路まで数百メートルに達した」としている。平成二十二年(二〇一〇)一月四日は十万人を超える(約十万人の)人出で、例年より一、二割多く、「一時はJR御茶ノ水駅近くまで行列ができた」とし、夕方まで行列は途切れなかったとしている。平成二十三年(二〇一一)一月四日は約十万人の人出があり、四、五日の昇殿参拝の予約は約千六百社の見込み(不況を反映して前年より多い)としている。千代田区や中央区を中心とした神田神社の氏子や近隣の企業のみならず、渋谷区や世田谷区、千葉県習志野市など、東京二十三区や東京近県などに立地する企業の参拝が見られ、仕事始め参拝を行なう企業のエリアが拡大していることがわかる。

そして、平成二十三年(二〇一一)の三月十一日には東日本大震災が発生することになる。

(二) 平成二十四年(二〇二二)～平成三十年(二〇一八)―東日本大震災発生以後

平成二十四年(二〇二二) 一月四日付の『讀賣新聞』夕刊は、「東京・千代田区の神田明神には、商売繁盛を願うスーツ姿の企業経営者やビジネスマンらが続々と訪れた。昨年は東京電力福島第一原子力発電所の事故の影響で、電力関係企業の業績は軒並み悪化。同区で電力プラント設計会社を経営する室屋利明さん(五四)の会社も二割ほど売り上げが落ちたが、役員二人と参拝した室屋さんは、『昨年末から開発に取り組んでいる新しい発電装置を反転の起爆剤にしたい』と話した」と伝えている。

同年一月五日付の『毎日新聞』東京版朝刊は、「官庁や企業が仕事始めとなった四日、商売の神様『えびす様』などを祭る神田明神(東京都千代田区)にはビジネスマンらが大勢初詣に訪れた。世界的不況が続く中、参拝客は景気回復や商売繁盛を祈願した。神田明神によると、おはらいを受ける企業数は、四～六日で計三千社を上回る見込み。例年より一割ほど多い。都内の会社員、谷口正衛さん(六二)は『商売繁盛、そして我々にも東北の人たちにも良い年になるように祈った』と話した」と伝えている。

平成二十五年(二〇二三) 一月五日付の『朝日新聞』朝刊は、社殿前で真剣に拝む写真を掲載して、「多くの企業で仕事始めを迎えた四日、商売繁盛の神様を祭る東京・神田の神田明神は、スーツ姿の会社員らでにぎわった。参道から境内までの間、歩けば肩が触れるほどの混雑で、列は表通りまで延びていた。神社によると、例年より多い約三千の企業がおはらいを受けたという。大鳥居宮司(現・名誉宮司―引用者註)は『昨年は震災の影響もあり参拝客が減ったが、今年は株価も上昇し、会社員の方が特に元気だ』と話した」と伝え、江東区から訪れた参拝者の声を掲載している。²⁶⁾

同年一月五日付の『毎日新聞』東京版朝刊は、「多くの企業が仕事始めを迎えた四日、商売の神様『えびす様』を



写真2 神田神社の仕事始め参拝の行列
(平成24年[2012]1月4日、筆者撮影)

祭った神田明神（東京都千代田区）では、ビジネスマンらが初詣に訪れ、景気回復や商売繁盛を祈っていた。ビジネス街が近いことから、境内は日が暮れても参拝客で埋め尽くされた。東京都内の会社員、浦上公敬さん（四五）は『今年こそ、景気が良くなると信じています』と手を合わせていた』と伝えている。

平成二十六年（二〇一四）一月六日付の『読賣新聞』夕刊は、「商売繁盛の御利益で知られる東京都千代田区の神田明神には六日朝から、スーツ姿のビジネスマンや経営者らが列をつくった」と報じ、仕事始め参拝が毎年恒例という千葉県船橋市の経営者など、複数の参拝者の声を掲載している。⁽²⁶⁾

同年一月七日付の『毎日新聞』東京版朝刊は、「多くの企業や官庁が仕事始めとなった六日、商売の神様『えびす様』を祭った神田明神（東京都千代田区）には大勢のビジネスマンらが初詣に訪れた。神田明神は東京・大手町や丸の内などのビジネス街からも近く、境内は日没後もスーツに身を包んだ参拝客で埋め尽くされた。アベノミクスによる景気回復への期待が続く中、おはらいを受けた企業の数も、例年の仕事始めより大幅に多い約三千社に上った」と伝えている。このほか、一月六日付の『日本経済新聞』夕刊が仕事始め参拝について報じている。

平成二十七年（二〇一五）一月六日付の『朝日新聞』朝刊は、社殿前で行列して真剣に拝む写真を掲載して、「多く

の企業が仕事始めを迎えた五日、商売繁盛の神様として知られる神田明神（東京都千代田区）は、スーツ姿の参拝客らでにぎわった。神社は大手町や丸の内などのビジネス街に近いこともあり、三千社以上の企業がおはらいを受けた。宮司（現・名誉宮司―引用者註）の大鳥居信史さん（七五）は『今年は人の流れが途切れない。今年こそ、景気が良くなって欲しいという思いの表れではないか』と話した』と伝えている。

同年一月六日付の『毎日新聞』東京版朝刊は、「仕事始めの五日、商売繁盛の神様『えびす様』を祭った神田明神（東京都千代田区）には大勢のビジネスマンらが初詣に訪れ、境内に業績アップを祈るかしわ手が響いた。朝から近くのビジネス街に勤める大勢の人が境内に集まり、夕方以降も会社帰りの参拝客らがスーツ姿で続々と訪れた。神田明神によると、この日おはらいを受けた企業は約三千社。景気向上への期待を反映してか、例年より多かつた昨年と同程度に上った」と伝えている。このほか、一月五日付の『日本経済新聞』夕刊が仕事始め参拝について報じている。

平成二十八年（二〇一六）一月五日付の『毎日新聞』東京版朝刊は、「仕事始めの四日、商売の神様『えびす様』を祭る神田明神（東京都千代田区）に多くの経営者やサラリーマンが初詣に訪れ、一年の商売繁盛を祈った。大安と重なったうえ、三月下旬並みの暖かさも相まって、例年より多い約十万人が参拝した。約三時間並んだ福岡市中央区のマーケティング会社社長、後藤竜也さん（三〇）は『去年もお参りに来て業績好調だったので、会社の発展を祈りました。景気が悪い会社の影響を受けないようにしたい』と気を引き締めていた』と伝えている。このほか、一月四日付の『日本経済新聞』夕刊が仕事始め参拝について報じている。

平成二十九年（二〇一七）一月五日付の『毎日新聞』東京版朝刊は、「多くの企業が仕事始めとなった四日、商売の神様『えびす様』を祭った神田明神（東京都千代田区）に多くの経営者とビジネスマンらが初詣に訪れ、商売繁盛を祈願した。神田明神は東京・丸の内などのビジネス街に近く、おはらいを受ける企業数は四、五日の二日間で約

四千社に上る見込みという」と伝えている。

平成三十年(二〇一八)一月五日付の『毎日新聞』東京版朝刊は、「仕事始めの四日、東京都千代田区の神田明神では、商売繁盛などを祈願するスーツ姿の参拝客の列が終日、途切れることなく延びていた。従業員と熊手を手に参拝した藤村太郎さん(四八)は『お参りするようになってから会社の業績も右肩上がり。従業員と家族が、けがなく幸せに過ごせば』と話した。五日までの二日間に約三千五百社の企業関係者が祈とうを受け、約二十万人が参拝に訪れるという」と伝えている。このほか、一月四日付の『日本経済新聞』夕刊が仕事始め参拝について報じている。

東日本大震災発生後の参拝者数を記事から抽出してみると、平成二十四年(二〇一一)一月四日～六日の昇殿参拝の予約が三千社を上回る見込み(例年より一割ほど多い)、平成二十五年(二〇一三)は時期は不明だが、例年より多い約三千社が昇殿参拝、平成二十六年(二〇一四)一月六日は約三千社(例年の仕事始めより大幅に多い)、平成二十七年(二〇一五)一月五日は三千社以上(約三千社)の企業が昇殿参拝、平成二十八年(二〇一六)一月四日は例年より多い約十万人が参拝、平成二十九年(二〇一七)一月四日、五日の二日間で昇殿参拝を受ける企業が約四千社を上回る見込み、平成三十年(二〇一八)一月四日、五日の二日間で約三千五百社が昇殿参拝を行ない、約二十万人が参拝に訪れるとしている。そして、本稿の冒頭に紹介した平成三十一年(二〇一九)一月四日の参拝者は約三十万人、昇殿参拝は四日に千社以上、七日に千五百以上としている。そして、参拝を行なう企業も江東区や千葉県船橋市のみならず、福岡市中央区から参拝に訪れる事例もあり、全国から仕事始め参拝に訪れていることがわかる。その背景には、「商売繁盛の御利益で知られる東京都千代田区の神田明神」や「商売繁盛の神様として知られる神田明神」「商売の神様『えびす様』などを祭る神田明神」などと、メディアが繰り返し伝え、メディアを通じて、神田神社が「商売繁盛」や「商売」に「靈威ある神社」としてのイメージが定着しつつあることが窺える。

おわりに

このように、神田神社の仕事始め参拝について見てきたが、同神社の仕事始め参拝が増加した要因について次のようにまとめることができる。

バブル崩壊による不況のなかで、平成四、五年（一九九二、九三）頃から企業の仕事始め参拝が見られるようになり、神田神社宮司の企業を重視する戦略のもと、「二〇〇〇年問題」を契機としたIT企業への参拝や神田神社の「IT祈禱」の実施なども影響し、千代田区や中央区といった神田神社の氏子や近隣の企業を中心に集団参拝が増加したことが窺える。

そして、バブル崩壊後の長引く不況のなかで、仕事始めの日に長い行列を作って参拝する光景がメディアによって度々報じられ、神田神社がメディアを介して「商売繁盛」や「商売」に御利益のある「霊威ある神社」としてのイメージが形成されていったことがわかる。

さらに、追い打ちをかけるように発生した平成二十年（二〇〇八）九月のリーマン・ショックを境に参拝者は増大し、東日本大震災の発生など、不況や災害に見舞われた厳しい社会状況のなかで、「商売の神様『えびす様』などを祭る神田明神」や「商売繁盛の御利益で知られる神田明神」など、メディアを通じて神田神社の霊威が繰り返し強調され、昨年の業績を振り返り、景気回復や更なる発展を祈願し、新たな気持ちで新しい年の営業を開始する機会として、神田神社への仕事始め参拝が恒例化していったことがわかる。そして参拝する企業も千代田区や中央区といった氏子の企業のみならず、都内や関東近県、九州など、全国から集まるように拡大してきたといえる。

こうした経緯によって、スーツ姿の会社員が行列を作って賑わうようになった神田神社の仕事始め参拝を「都市



写真3 神田神社仕事始め参拝 境内周辺の屋台の賑わい
(平成24年[2012]1月4日、筆者撮影)

祝祭」として捉えるならば、その役割としては、現代の神田祭が賑わいを見せる要因として考えられる五つの特徴(「神田祭モデル」²⁷)のうち「都市祝祭と町内の祭りの複合構造」に近い、「都市祝祭と社内の祭りの複合構造」を持っていることが指摘できる。これは、既に拙稿で指摘した、神田祭などの都市祭りへの企業の参加は、多くが企業の内部に閉ざされる形で役員が中心となっており、行なわれる企業の神社の祭りとは異なり、一般社員も参加し、企業が立地する地元の地域社会や一般観衆に企業の存在を示す「見せる祭り」としての役割を持つ。同時に、社内に対しては、社員教育の一環としての性格、社員同士の懇親やレクリエーションの場としての意味合いも持つ、という複合構造²⁸に対応する。つまり、

神田神社の仕事始め参拝は、幹部や管理職のみならず一般社員も参加し、昇殿参拝においては、集団で御神酒を受けた御守を社員同士で分けたりすることから、社内の共同性を形成する機会となっていることが窺える。都市祭りへの企業の参加と仕事始め参拝は、両者とも都市祝祭への参加を通じて、社内の共同性を育む役割を持っていると考えられる。

ただし、仕事始め参拝は、神輿巡幸に参加するといった都市祭りへの企業の参加と異なり、企業の存在を示す「見せる祭り」としての要素は希薄である。そうした意味では、一般社員が参加する点が異なるものの、むしろ企業の神社の祭りへの参加に近いといえる。しかしながら、仕事始め参拝の光景をメディアを通じて

「見る」側の存在があることを忘れてはならない。必ずしも、参拝者はメディアを通じて他者へ「見せる」ことを意図してはいないものの、新聞記事やテレビ中継、インターネットなどを通じて「見る側」は存在するのである。そして、神田神社境内の賑わいと、「商売の神様」や「商売繁盛の御利益で知られる」などと神田神社の靈威が繰り返し強調されることで、「見る」側から参拝「スル」側へシフトしていく構造が見て取れる。

このように、「神田祭モデル」の五つの特徴（要素）をベースに、神田神社の仕事始め参拝を照射してみると、バブル崩壊という社会的・経済的な危機によって、神田神社という「結集のための核」へ企業の正月の参拝が増え始め、神田神社宮司の「個人の活躍（人的要因）」による、企業に氏子意識を高めてもらおうとする取り組みが連動して「企業の参加」が進み、仕事始め参拝の賑わいが形成された。そのことによって、「都市祝祭と社内の祭りの複合構造」が生じ、メディアにも繰り返し取り上げられ、神田神社の靈威は強化されていった。そして、リーマン・ショック以後、さらに参拝者が拡大するなかで、メディアを通じて神田神社の靈威が繰り返し強調され、「結集のための核」としての神田神社の靈威がより強化され、メディアを「見る」側が参拝「スル」側へ移行し、不特定多数の企業が集う非日常的な場が形成されたと位置付けられる。特に、人的要因と結集のための核の存在、メディアの介在は大きいといえる。そして、企業と神社の関係を見るうえで、いくつもの視座を与えてくれる。すなわち、社会的・経済的な危機は、個人や企業をどのように突き動かし、そこに神社という「結集のための核」はどのように介在しているのか。また、メディアはどのように「結集のための核」の靈威に作用し、「企業の参加」に影響を与えているのか。企業は参加することによって、そこにどのような共同性が形成されるのか。ほかの都内神社の仕事始め参拝を考えるうえでも重要な視点であると考えられる。

他方で、宗教学の中牧弘充が「会社神は『苦しいときの神だのみ』ではなく、ふつう社屋の完成や周年事業の際に

勸請される^⑩」と指摘するが、企業の神社は企業が社会的・経済的な危機においては勸請される例は少ないものの、企業の神社に参拝したり、神田神社の仕事始め参拝のように、氏神社や崇敬社、商売繁盛に御利益のある神社に参拝するといった行動を取るのではなからうか。そして、企業のなかには神札を受けて、会社内の神棚に祀るのではなからうか。このことは企業と神社の関係を見るうえで、複数の神社への関わり方を総合的に捉える必要性を示唆してくれる。

以上、神田神社の仕事始め参拝は、現代社会のなかで拡大していることから、企業と神社の関係のみならず、都市と宗教の関係や現代日本人の宗教性を考えるうえでも判断材料となる事例であるといえる。

註

- (1) 「企業」とは、一般に「利潤獲得を目的とする生産単位として、生産、販売などの経済活動を継続して行なう協働システムないし組織体。またはその活動」を意味し、出資形態により、私企業、公企業、公私合同企業に分けられる(『日本国語大辞典』「きぎょう」の項、Japanknowledge Lib (<https://japanknowledge.com/library/>))。
- (2) このほか、東京都千代田区の不動産管理会社を経営する渡部毅さん(四七)は「平成の時代はリーマン・ショックなどもあったが、何とか乗り越え、会社として成長を遂げられた。次の時代でも大きく飛躍できるように良いスタートを切りたい」と願った^⑪とする記事を掲載している。
- (3) 大島居信史編著『神田明神のこころ』春秋社、平成三十年(二〇一八)、一五九頁。
- (4) 秋野淳一『神田祭の都市祝祭論 戦後地域社会の変容と都市祭り』岩田書院、平成三十年(二〇一八)。なお、五つの特徴(要素)とは、①「都市祝祭と町内の祭りの複合構造」、②「結集のための核の存在」、③「個人の活躍(人的要因)」、④「企業の参加」、⑤「非日常化するイベント」である。

- (5) 秋野淳一「企業の参加と都市祭りに関する一考察 東京の神田祭・山王祭・渋谷の祭礼を中心に」『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第十三号、國學院大學研究開発推進センター、平成三十一年(二〇一九)。
- (6) 少し前のデータであるが、平成二十二年(二〇一〇)の一月四日の金王八幡宮には、社殿から神門付近まで行列するほどのスーツ姿のサラリーマンが並んで参拝する様子が見られた。また、北谷稲荷神社では、宮司の杉本有香氏によると、一月四日、五日が仕事始め参拝のピークで、元日に渋谷バルコ、二日に東急ハンズ、九日に西武渋谷店、キリンビールは三部署別々に参拝するなど、約三十社の祈禱の予約が入ったという(筆者によるインタビュー調査)。
- (7) 阪本是丸は、「稲作信仰と神道教学の多様性」のなかで「農村と都市、稲作文化と非稲作文化。これらに対立概念としてしか把握できないならば、おそらく大規模神社にも小規模神社にも将来はないだろう。もちろん、両氏(宮崎義敬氏と幡掛正浩氏—引用者註)がいられるやうに、稲作や稲作文化と神社神道との密接・不離の関係はいくら強調しても強調しすぎるといふことはない。しかし、だからといって、農村と都市、あるいは近代・現代社会と前近代社会を対立的に捉へて、農村にしか神社存立の基盤はなく、また米は『商品』であつてはならないといった議論が、はたして本当に神社神道の将来を保障するものであるのかどうか。これは十分検討に値する問題であらう。さうした問題意識を持ったのも、一面では都市が神社への信仰・崇敬を普及させ、また『商品』としての米が日本文化を豊かにしたと筆者は考へるからである」(阪本是丸『神道と学問』神社新報社、平成二十七年「二〇一五」、四一頁)と指摘している。
- (8) 神社新報社編『企業の神社』神社新報社、昭和六十一年(一九八六)。
- (9) 間組の間組守護神社、竹中工務店の竹千代稲荷神社、日本植生の植生神社、サッポロビールの札幌神社、朝日麦酒の旭神社、キッコーマンの琴平神社、カゴメの伏見稲荷神社、東洋水産の幸稲荷神社、中部製糖の中糖稲荷社、柳川採種の研究会神社、王子製紙の王子神社、資生堂の成功稲荷神社、北興化学工業の北興神社、求心の葉租神社、筑波神社、日本石油の伊夜日子神社、出光興産の宗像神社、横浜ゴムの稲荷神社、秩父セメントの有恒神社、新日本製鐵の高見神社、大同特殊鋼の福光稲荷神社、三菱金属の土佐稲荷神社、日本鋳業の山神社、日本製鋼所の武蔵神社、秋田製鐵所の罫田多度神社、日立製作所の熊野神社、東芝の出雲神社、神鋼電機的神鋼電機の神社、松下電器部品の守護神社、三井造船の香取神宮、石川島播磨重工業の石川稲荷神社・豊洲神社、トヨタ自動車の豊興神社、日産ディーゼル工業の弥栄神社、関東自動車工業の関東神社、トキコトキコ八幡神社、三井グループの三囲神社、三菱銀行の三菱稲荷神社、多摩中央信用金庫の多摩神社、東京急行電鉄の東横神社、日本

航空の日航香取神社、朝日放送のテレビ朝日稲荷神社、宮崎放送のMRTセンター五所稲荷神社、北陸電力の有峰湖神社、東京瓦斯の豊洲稲荷神社、常磐興産の山神社、日本空港ビルディングの穴守稲荷神社・羽田航空神社、ナゴヤ球場のナゴヤ球場神社、富士観光開発の富士桜神社、大阪回生病院の回生天満宮、である。会社名はいずれも当時のもの。

(10) 前掲『企業神社』一〇頁。

(11) 前掲『企業神社』四一頁、五一頁、五七頁、八一頁、八五頁。

(12) ほかに、間組の間組守護神社では、二月初午、安全週間の初日、七月一日の例大祭・安全祈願祭に社長以下参列のもと、祭典が斎行される。また、毎月一日には、安全担当重役以下参列のもと、社員一同、工事の安全を祈願する(一七頁)。朝日麦酒の旭神社には、毎月一日と十五日に社長が参拝する(二七頁)。キッコーマンの琴平神社では、十一月九日・十日を祭日として、社長を斎主に祭典が執行されたという(二九頁)。中部製糖の中糖稲荷社では毎朝夕、社長以下の参拝を欠かせないという(三五頁)。王子製紙苫小牧工場の王子神社では、九月十二日の例大祭に、工場長、従業員をはじめ関係・関連会社、退職従業員など百人を越す人々が参列するという(三九頁)。出光興産千葉製油所の宗像神社では、宗像大社の四月と十月の祭日に合わせて行なわれ、近隣に鎮座する姉崎神社の神職を斎主に、従業員が参列して祭典が執行される(四九頁)。日本製鋼所東京製作所の武蔵神社では、十二月一日を祭日として、工場長以下、祭典に参列し、製作所の繁栄と安全を祈願する(六三頁)。石川島播磨工業深川工場の豊洲神社では、二月十日の祭日に工場長以下の参列のもと祭典が斎行される(七七頁)。関東自動車工業の関東神社では、七月十六日の例祭に、会社役員、労組、関連企業の代表などが参列し、社業の繁栄と全従業員の安全と健康を祈願する(八三頁)。三井グループの三開神社では、毎月一日社長以下の幹部が参列して月例祭が行なわれる(八七頁)。東京急行電鉄の東横神社では、十月の例祭に、グループの全社長参列のもとに祭典が行なわれる(九三頁)。

(13) 前掲『企業神社』一九頁、六一頁。また、東洋水産本社の幸稲荷神社では、初午と八月十七・十八日の年二回祭りが行なわれるが、当日の昼食は社員全員おいなさんとい(三三頁)、飲食(直会)を通じて多くの社員が参加するケースもある。

(14) 前掲『企業神社』二三頁、二七頁、三七頁、三九頁、五九頁、六七頁、七九頁、九七頁、一〇三頁、一〇五頁、一〇七頁。

(15) 前掲『企業神社』四九頁、五五頁、六一頁、七五頁。

(16) 前掲『企業神社』七一頁。

(17) 前掲『企業神社』一九頁、四七頁、五一頁。なお、新年の事例ではないが、求心では、四月一日の早朝に、社長以下、うち揃っ

て大宮八幡宮に本年度の社運興隆の祈願に赴き、そのあと入社式などに臨むという（四五頁）。

(18) 大鳥居信史「特別インタビュー 企業が求める神社の役割とは？」『別冊宝島二〇八二号 日本の神様のすべて』宝島社、平成二十五年（二〇一三）、八二―八三頁。また、前掲『神田明神のころ』にも、大鳥居信史氏のインタビューが掲載され、企業参拝について「私が宮司になって一番最初にしたことですが、元々、銀行などの参拝は多少あったのですが、企業の方々に少くとも年に一度は、氏神様へご参拝いただくようにお願いをして参りました。ご祭神のえびす様は商売繁盛の神様ですし、大手町・丸の内という氏子界限は企業のメッカでもありますからね。多くのご参拝をいただき、おかげさまで文化交流館といった大がかりな文化施設が建てられるようになったわけです。そうした神社信仰をいただいているありがたさを、日本の伝統文化をお伝えするなどして、少しでもお返しして社会に貢献してまいりたいと思っています」（二二頁）と話している。

(19) 「毎年参拝に来ているという、千代田区の証券会社社員のグループは、『会社名はちよつと…』といいながら、『今年は、人が多い感じがするね。景気が良くなるようにお願いしますよ』と話した。都銀系の投資顧問会社は、社長をはじめ、各部の部長など二十人が足を運んだ。年金推進部長は、『調子は良くなっているのですが、ますます飛躍できるように』という。神社近くのJ・R御茶ノ水駅付近にある大手メーカーの営業本部の部長ほか約二十人も、参拝は年始の恒例だという。業績はじわじわと上向きになってきたので、今年はさらに期待して、拝みにきたという。『うちは、各部ごとに参拝にきているから、十以上のグループが来るんじゃないかな』。神社によると、『昇殿参拝』の初穂料は三万―七万円だが、今年も、百万円を弾んだところもあったという。お守り、縁起物の売れ行きも好調だ。大手町にある商社管理部門の女性社員を含む有志が昨年買ったのは、千五百円の熊手（くまで）だったが、今年もひと周り大きい三千円のものにした。『去年初めて参拝したところ、資産圧縮の仕事がうまくいったんで』。

(20) 『パン、パン』。手を合わせる音が青空に小気味よく響く。午前八時前から、境内には団体参拝客が続々と詰めかけた。午前十時ごろには、拜殿でのあはらいを待つ列が門の前まで続いた。大手町の不動産会社からは、営業部の社員ら六人が訪れた。営業部長は『不景気というが、これが普通なんですよ。パブルのころが異常だった』と控えめなコメント。業績アップを祈願してきたという。昨年の流行語にもなった「IT（情報技術）関連の企業も、この日ばかりは古式ゆかしい神事に身をゆだねた。千代田区の大手情報通信会社の営業担当部門は、統括部門以下、約二十人の社員が躍進を願った。『早く景気がよくなってほしい。お客さんの設備投資が進まない和我々の業績も上がりませんから』」。

(21) 「パソコン周辺機器メーカー『エレコム』(本社・大阪市)の葉田順治社長(四八)は東京支社の社員五十四人とお参りに。葉田社長は『パソコン業界は成長期から安定期に入り市場環境が激変している。倒産したり、売り上げが大幅ダウンした社もある。うちもよそのことをとやかく言える状態ではなく、頑張るしかない』と決意を語った。建設業『トマック』(千代田区)の安全環境部長、星川修司さん(五四)は『昨年は中堅ゼネコンも倒産し、不況の波をまともにかぶった。あと四、五年くらいは回復しないでしょう。神様にでもお願いしようと思って来ました。業界全体の公共事業を増やしてほしい』と話していた。大手都銀の部長(五八)は『行名は勘弁してほしい』と前置きし、『昨年は銀行がいじめられる散々な年だった。日本経済をあるべき姿に戻してもらうためにまず政府にしっかりとってほしい。神様にもすがりたくなる気分だ』と言葉少なだった。『カーテン・じゅうたん王国』(中央区)の岩崎由雄専務(六二)は幹部社員十四人と参拝した。『昨年は社長交代や私自身二か月入院するなど波乱の年だったが、何とか乗り切ることが出来た。参拝は今年初めて。気分一新、スタートしたい』。海運業の『東神油槽船』(中央区)の総務部次長、三田宏さん(五八)は『物流業界は国際競争がシビア。同時多発テロで物流もしぼんでいるし、今年は展望が開ける年になってほしい』と願いを込めた」。

(22) 前掲『神田明神のこころ』一五五頁。

(23) 「『第一に景気回復。やっぱりこれですね』。参拝の順番を待っていた建築資材卸業の男性役員(五三)は即座に言った。改修を先送りする動きが多く、売り上げは二割以上減った。『将来の展望が見えてこない、不安でリフォームできないでしょう』。不動産会社経営、溝口昭太郎さん(四〇)は『去年は会社の売り上げが大幅に減り、不動産業界にとってはひどい年だった。今年は去年の損を取り戻し、飛躍の年としたい』と話す。渋谷区の不動産会社は社員十五人で参拝。福をかき込む熊手は、高さ一メートル半を超す三万円のものを買った。『この不景気、うちの業界が一番厳しいのでは』と部長の山本隆士さん(四一)。昨年の売り上げは前年の三分の二にとどまったが、『縁起物だから、他の経費を削ってでも』と熊手の値段は変えなかった」。

(24) 「樹脂や薬品を扱う商社の部長級男性社員(五七)は『オイルショックやバブル崩壊も経験したが、悪い社会状況はいつまでも続かない。今を辛抱すれば、いつかは追い風が吹いてくれる』と希望を込めて話した。熊手や破魔矢を買い込むサラリーマンの姿も。都内の損害保険会社の男性社員(四八)は『低迷した売り上げを挽回したい』と、一番大きな二万円熊手を買って求めている」。

(25) 「東京都江東区の会社員北市伊佐雄さん(四二)は『株価がもつとあがって、経済を回してほしい。神様にしっかりと頼んでき

ました』。

(26) 「不動産会社と建設会社を経営する千葉県船橋市の前田義美さん(六三)は毎年仕事始めの参拝が恒例。昨年はアベノミクスなどによる株高の恩恵を受け、株で個人的に利益を得たという。『今年も仕事がうまくいくことと社員の健康を祈願した』と笑顔で話した。東京都豊島区の小川秀敏さん(三六)は昨年、千代田区内の電子部品卸売会社の社長に就いたばかり。社員約十人と参拝し、『経営は守りも大切だが、今年は積極的に攻めて売り上げを増やしたい』と意気込んだ。

(27) 前掲秋野『神田祭の都市祝祭論―戦後地域社会の変容と都市祭り―』。

(28) 前掲秋野「企業の参加と都市祭りに関する一考察―東京の神田祭・山王祭・渋谷の祭礼を中心に―」、二二七頁。

(29) たとえば、テレビ朝日ニュース「中継 仕事始め『商売繁盛』願う」(平成二十九年「二〇一七」一月四日放送)、
「中継仕事始めえびす様詣で」(平成三十年「二〇一八」一月五日放送)など。

(30) 中牧弘充『会社のカミ・ホトケ―経営と宗教の人類学―』講談社、平成十八年(二〇〇六)、六三頁。

追記

本稿は、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業「渋谷の都市形成と再開発に関する研究」(研究代表：阪本是丸教授)の研究成果の一部である。